

特集 宝の山 磐梯山

わたしたちが朝な夕なに目にする磐梯山。
美しく雄大なその姿は、天にかかる磐の梯子、
いわはし山と呼ばれていた。
万葉のいにしえには会津嶺と詠まれ、
民謡では宝の山と歌われた磐梯山。
この町で暮らすわれわれに、
かつては噴火という悲劇を、
そして、美しい景観など、
それ以上の恵みをもたらし続けている。
これからの未来、磐梯山は
どんな宝であり続けるのか。
未来に受け継ぐべき宝とは。

【磐梯山】猪苗代、磐梯、北塩原の3町村にまたがる活火山で標高1,819m。
主峰磐梯山のほか、赤埴山(1,430m)、櫛ヶ峰(1,636m)を含めて「磐梯山」とも呼ぶ。

噴火

磐梯山
噴火の圖



磐梯山噴火を報じる錦絵 井上探景 画 当時錦絵は新聞の付録であった。直接災害現場を見て書いたわけではないが、爆風が吹き飛ぶ岩、なぎ倒される家や木々など、爆発の様子が生々しく伝えられている。 絵／磐梯山噴火記念館

1888(明治21)年7月15日、午前7時45分。激しい地震とともに突然の大噴火が起こった。そこには、いつもとはあまりにも違う磐梯山の姿があった。

それは全く突然の出来事だった。強い地震の中、轟音が鳴り響き、磐梯山が噴火した。小磐梯からは噴煙が立ち上り、空を黒く覆いつくした。吹き飛ばされた小磐梯は、岩なだれ(岩なだれ)となつてふもとの村々を襲い、477人の犠牲者を出した。磐梯山の噴火は、明治以降では日本最大の火山災害であり、日本赤十字社初の災害救護活動であった。

予兆

磐梯山は、806(大同元)年に噴火したという言い伝えがあっただけで、それから1,000年以上もの永い間、沈黙し続けてきた山であった。ただ、小磐梯の山麓には、温泉や硫化水素ガスの噴出口などがあり、地下には高温な地層があることが知られていたに過ぎなかった。

そんな中、噴火の1週間前から続いた火山性地震を、噴火の前兆と思う住民は皆無であった。

噴火

噴火のあった7月15日の朝は、西北西の微風があつたものの、雲一つない快晴であつたと伝えられている。午前7時ごろから遠雷のようなゴウゴウという音が鳴り響き、たびたび軽い地震が続いていた。それが30分後には強い地震となつた。

— 何かがおかしい —

人々は不安に思い始めた。そして7時45分、雷が一度に100発も落ちたような轟音とともに小磐梯が噴火を始めた。磐梯山の上空約1,500メートルまで噴煙が立ち上り、15回から20回ほどの噴火を繰り返した。中ノ湯温泉に宿泊していた鶴巻

浄賢は、後にこの時の様子を、生きた心地が少しもしなかった。と語っている。最後の噴火は、北側に大きく抜け、小磐梯の上部が山肌を滑り落ちた。小磐梯は、斜面を滑り落ちながら大崩壊し、細片化して山麓を襲った。これが岩屑なだれである。

被害

松原村(現在の北塩原村)では、雄子沢地区などが岩屑なだれに巻き込まれ、数十層もの土砂の下に埋もれた。この噴火で、当時の松原村住民の約4割にあたる234人が亡くなるなど、甚大な被害を受けた。町内では、長瀬川沿いに

押し寄せた岩屑なだれが、長坂地区を襲った。地区内では、朝から田畑に出かけ、農作業をしていた人々が被害に巻き込まれた。このなだれで、長坂地区の住民の半数以上の命が失われた。櫛ヶ峰と赤埴山の間では、岩屑なだれとともに爆風(火山灰や小石を含んだ、恐ろしい破壊力がある風)が吹き荒れ、見称地区や渋谷地区を襲った。渋谷地区では、土砂ではなく、爆風で家が倒壊する被害が多かった。長坂地区から直線で2キロ程度しか離れていないにもかかわらず、災害の種類が違ったため、犠牲者は少なかったと報告されている。町内の犠牲者は、合わせて178人に及んだ。



国指定天然記念物
見称の大石
(長さ約9m×幅約6m×高さ約3m)
磐梯山の噴火により発生した岩屑なだれのうち、南東方向に流れた端が町内の見称地区である。この大石は、その時に流されてきたもので、爆発となだれのすさまじさを物語る貴重な資料として、現在も見称地区内に残る。

福島縣下磐梯山噴火の大略と記す。明治二十一年七月十五日午前七時七十分小山鳴動して一時小破烈し近傍村々の家屋傾倒不能散り又八埋まり人民死に者数百人僅く免れざるもの八百父母妻子兄弟を失ひ其屍を掘索むる有様實小見ふ忍びと又川上温泉八数大の下小埋められ却て小山を現出する同地の家屋住氏の勿論浴室五六十人の影も無く其地埋りし者掘出せし身も黒く帯或ハ頭部を死あり又四肢なきもの故男女の別を知らざる如き負傷人の中頭を半分行刺せし者如き負傷人の中頭を半分失ひ面部の皮肉を剥れ実小見も有様又長瀬川二里余も埋まり其水流れ流るるを浮説も逃び東西に逃げ走る警備官八近傍の巡査も召集し非常不慮かられ其況を其混雑も戦地不守し災害地へ山とる川と変じ夫況を其混雑も戦地不守し災害地宮内省より三千円を下賜り難有とて江湖の慈善者ありも夫々恵らしさあふれどとあり

祈り

噴火の犠牲となった先人たちの魂を慰め、
 尊い犠牲の上に成り立つ、現在の繁栄と美しい自然を守ることに。
 その責任を自覚し、後世に引き継ぐことを御霊の前に約束する

磐梯山が噴火した日と同じ7月15日、町内では、磐梯山噴火殉難者供養祭が開かれた。供養祭は、噴火の殉難者に対する祈りと今日の繁栄に感謝をささげる磐梯まつりの始まりを告げる行事として、毎年実施されている。

で伝えていく。噴火によりもたらされた美しい自然を、責任を持って後世に引き継ぎたい」と式辞を述べた後、読経と焼香で犠牲者の冥福を祈った。

の観客が集まった。「火の祭典」では、磐梯神社からの御神火を移したたいまつ行列が中央商店街を練り歩き、町内を炎で赤く染め上げた。



1 読経と焼香で犠牲者の冥福を祈った噴火殉難者供養祭 2 御神火を前に祈りをささげる巫女(猪苗代中学校の生徒ら) 3 たいまつ行列には約500人が参加。町内をたいまつで埋めつくした 4.5 磐梯神社でもとされた御神火は、巫女や天狗らの手によっておまつり広場まで運ばれる 6 ステージイベントで迫力の演奏を披露する、ばんだい荘あおば和太鼓の会 7 ミニSLに乗って遊ぶ子どもたちとそれを背後から見つめる磐梯山 8 山車とみこしの競演に参加。元気いっぱい町内を練り歩いた猪苗代中学校バドミントン部の生徒ら 9 町内小学校の児童らによる音楽パレード。わが子の演奏を一目見ようと、沿道には大勢の父兄らが訪れた(写真は吾妻小学校の生徒ら) 10 昨年は雨で中止になった磐梯山総おどりも今年は無事開催された。500人が参加して輪を作り、中央商店街を流し踊った。



恵み

噴火による悲劇はあったが、「宝の山」と歌われるこの山はそれ以上の恵みをもたらし続けてきた

数万年前の磐梯山の火山活動と川桁断層の地殻変動によって、猪苗代湖は誕生した。噴火がもたらすのは、悲劇だけではない。それ以前から、多くの恵みをわれわれにもたらしてきたのだ。

自然

1888年の噴火により発生した岩屑なだれは、10方所もあった磐梯山北側の沢をせき止め、300余りにおよぶ裏磐梯の美しい湖沼群を作り上げた。裏磐梯の湖沼群の水がさまざまな色に見えるのは、流入している火山性の水質の影響や、植物・藻などのせいである。

一方、岩屑なだれに覆われ、荒地のままだった裏磐梯に植林し、緑の森に変えたようにした人物たちがいた。裏磐梯緑化の父と言われている遠藤現夢（本名十次郎）らである。遠藤らは、1910年ごろから裏磐梯に住み込み、私財を

投じてアカマツ、スギやウルシなど約10万本を植え、同時に五色沼周辺の道路整備などを手がけた。現在の裏磐梯の景観が作られた陰に、先人たちの血のじむような努力があったことを忘れてはならない。

猪苗代湖、裏磐梯、吾妻山と安達太良山を含む地域は、1950年9月5日、磐梯朝日国立公園に指定された。福島、山形、新潟の三県にまたがる、日本で3番目に大きな国立公園の一地域である。ほかの地域は、出羽三山と朝日山地を含む出羽三山・朝日地域、飯豊山地を主とする飯豊地域である。

磐梯朝日国立公園への指定は、登山、スキーや避暑に訪れる観光客を増加させ、磐梯山周辺エリア全体の発展に大きな貢献を果たした。本年は、磐梯朝日国立公園指定から60年を迎えた記念の年。裏磐梯の裏磐梯猫魔ホテルでは6月20日、記念式典が催され、関



猪苗代スキー場から猪苗代湖を望む



磐梯朝日国立公園指定60周年記念式典の様子(裏磐梯猫魔ホテル)



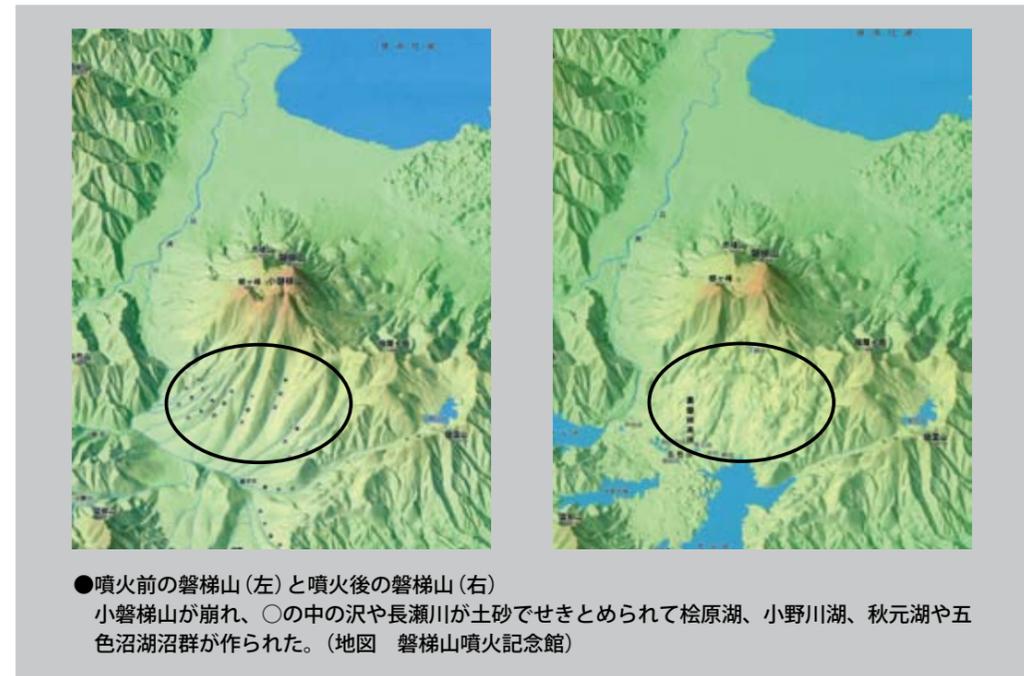
五色沼(青沼)



桧原湖と磐梯山



銅沼



●噴火前の磐梯山(左)と噴火後の磐梯山(右)
小磐梯山が崩れ、○の中の沢や長瀬川が土砂でせきとめられて桧原湖、小野川湖、秋元湖や五色沼湖沼群が作られた。(地図 磐梯山噴火記念館)

係者らが60周年を祝った。

スキー場

磐梯山の噴火から66年後の1954年、爆裂火口壁が大雨によって崩れ、斜面崩壊を起した。その堆積物の地形が現在の裏磐梯スキー場を作り上げたのである。

また、磐梯山を中心とした表磐梯のスキー場群は、全国でも屈指のスキーリゾートとして発展した。バンクーバー五輪男子モーグルで活躍した遠藤尚選手、バンクーバーパラリンピック男子アルペンスキー座位大回転で見事メダルを獲得した鈴木猛史選手など、優秀な選手を数多く輩出し、日本のスキー界の発展にも寄

与した。FISワールドスライルスキー世界選手権猪苗代大会など、大きな国際大会が開かれたことも記憶に新しい。

雇用・教育

磐梯山が与えてくれるのは、観光客だけではない。夏は主に農業に従事する人が多いこの町で、冬期間のスキー場の雇用は、町民の生活を支えてきた。農業とスキーの両立という仕事に魅せられて、インターンしてくる若者もいる。磐梯山に起こった悲劇と今日の繁栄を伝えることで、災害に備えることの大切さ、豊かな自然を守ることの尊さを、地域の「宝」である子どもたちに伝えることができる。



(社)猪苗代観光協会 主査
大竹 ともあき 知明さん

磐梯山は、猪苗代磐梯山エリアだけでなく、会津地区全体の中心的な存在。先人たちから受け継がれた「宝の山」を無駄にすることはできません。観光資源として、有効に活用しなければいけないと思います。

猪苗代観光協会では、おトクなプレミアム商品券「いなチケ」を販売し、町外の人に、スキー場を含めた冬の猪苗代を満喫してもらえるよう、積極的にPRしています。

冬以外は、この町の豊かな自然を生かした体験プログラムなどを用意しています。たくさんの方が猪苗代を訪れて、楽しんでくれることを願います。

魅力

県内に山は数あれど、磐梯山は特別な山
絶対的なオンリーワンの存在。
磐梯山の素晴らしさを知る二人が、その魅力を語る。

磐梯山の四季の美しさには
いまだに感動します。



Interview

I ターン就農者 安藤 剛さん

Profile 1975年11月 東京都生まれ
学生時代から、裏磐梯のスキー場でインストラクターとして働く。この地の豊かな自然に魅せられ、Iターンを決意した。春から秋は農業、冬はスキー場でパトロール隊員として働く。趣味はフットサル。

19歳のころから、裏磐梯のスキー場でインストラクターをしていたという安藤さんは、磐梯山周辺エリアの魅力にとりつかれた1人。平成16年、猪苗代にIターン。スキースクール時代の同僚と3人で、春から秋は農業、冬はスキー場で働くという生活を始めた。

「町の新規就農者第1号というところで、町役場も手探り状態。わたしたちも農業の詳しい知識がない状態での出発だったので、いろいろと苦労をしました」と当時を振り返る。

会津農林事務所の普及員に、宇川クリーンファームの宇川進さんを紹介され、宇川さんの指導を受けながら、町のブランド品である磐梯トマトの栽培を始めた。「ハウスの場所が翁島地区にあるので、磐梯山を正面から見ながら仕事をしています。これは気分がいいですね。たまに県内のほか

の産地を見に行くのですが、磐梯山のようなきれいな山はないと思います」と語る。現在は5反分の磐梯トマトを栽培し、農業は順調だ。私生活でも、1月に長男の洋輝くんが誕生。猪苗代の自然の中で伸び伸びと育ってほしいと願っている。

この町に住んで初めて迎えた春、磐梯山の緑の美しさに感動したという安藤さん。

「あらためて考えると、365日、毎日磐梯山を見て生活しています。でも、四季折々の美しさに、いまだに感動するんです。これは、ずっと地元で暮らしている人にはわからない感覚かもしれません」と話す。

これからの目標は、友人をたくさん増やすことと、一軒家を建てることだという安藤さん。「この恵まれた土地で、いつまでも暮らしていきたい」と笑顔で話した。



Interview

磐梯山の守り人 江花 俊和さん

Profile 1943年9月 町内葉山生まれ
猪苗代山岳会会長。いなわしろ伝保人会代表、県自然保護指導員、環境省自然公園指導員なども務める。ガイドやパトロールなどで、磐梯山だけでも年間30回以上は登るといふ、登山と自然保護の達人。

「表磐梯の雄大な景色とやさしさ、そして、裏磐梯の噴火口跡の荒々しさ。この両面を持つている磐梯山は、非常に特殊で魅力的な山です」日本全国のいろいろな山を登った江花さんは、自信を持って言い切った。

「磐梯山は、貴重な高山植物の宝庫でもあります。沼ノ平周辺に分布するパンダイクワガタは、磐梯山の固有種で、6月下旬ごろには可憐な紫色の花を咲かせます。また、川上登山口から登るコースの途中にある、シラタマノキの群生なども見どころの一つですね」と笑顔で語る。

江花さんが猪苗代を離れ、東京で生活していたころも、よく磐梯山を思い出し、古里に思いをはせたという。

「磐梯山は、わたしにとって心が休まる大切な場所です。皆さんと同じく、誇りに思っています」と語る江花さん。誇りに思うから大

切にしたい。町外から来る人にも、もつこの山のことを知ってほしい。という気持ちでガイドをしている。「ガイドで山に登り、珍しい花、匂いのする葉や食べられる植物などを見せると、子どもたちは目を輝かせます。磐梯山は、自然の素晴らしさを教える最高の教材です」と胸を張る。

猪苗代山岳会では、磐梯山に登るすべての人に、きれいな山だと言ってもらいたいとの思いから、自然なるべく手を加えず、最小限の手入れをし、安全を確保するように整備を実施している。

現在、磐梯山に登る人の7、8割は八方台登山口からの登山者だが、ほかの登山ルートにもそれぞれ違った魅力があると江花さんは語る。「いろいろな登山口から登って、磐梯山の魅力を再発見してほしいです」と笑顔を見せた。

磐梯山は、わたしの古里の象徴
この山を誇りに思っています。

考察

磐梯山

磐梯山の噴火をどう生かすべきか

「1888年の磐梯山噴火の原因は、大規模な水蒸気爆発。しかも、その爆発が小磐梯の山体崩壊を引き起こし、岩屑なだれとなって被害を拡大した。あの噴火は、数万年に1回しか起きないようなレベルの大噴火です」そう語るのは、磐梯山噴火記念館の佐藤公副館長。

「あまりにもすさまじい災害だったので、住民たちは、こうすれば助かったであろうという教訓が見い出せなかったのでしょう。だから教訓のようなものが残っていない」と佐藤さんは指摘する。わたしは町民にできることは、磐梯山のことを、噴火の特徴を知ることだ。122年前の噴火は、めったには起きない。しかし、規模の小さい噴火であれば、起きる可能性は十分にある。

「磐梯山が噴火したときに、どのような被害が及ぶかということを事前に学ぶことが必

要です。そうすれば、自分たちで被害を予測したり、避難をするなどの判断ができるようになる。地域住民に求められるのは、そういうことなんです」と佐藤さんは語る。

「昨年3月から、噴火予報と警報をレベル1から5までの5段階で発表する、噴火警戒レベルという考え方が導入されました。これに対応した防災マップを作り直し、各家庭に配布しなければいけないと協議会が話し合いを進めているところなんです。各地域で説明会を開いて、住民の火山防災に対する意識を向上させる必要があります」と佐藤さんは訴える。

防災意識はもちろん、災害に備えることを忘れない「忘災」。その意識が、町民に求められている。

世界に誇れる磐梯山をジオパークに

ジオパークとは、ジオ(Geo・地球、大地)とパーク(Park・公園)をつなげた言

葉。地形学・地質学的に重要で、保全する価値のある場所を指している。

磐梯山の噴火によって形成された景観が、地質学的にも素晴らしいものであることを地域住民や観光客に伝えたい。磐梯山周辺地域こそジオパークにふさわしい。そんな思いで佐藤さんら有志は、この地域のジオパーク認定を目指す運動をスタートさせた。

「まず、地域の人に、磐梯山はどんな山なのかを理解してもらおうと、磐梯山フィールドガイドブックという冊子を作りました。地質、歴史、信仰、民俗や動植物などすべてを網羅して、地域の学校で使ってもらおうと配布しました。これを活用して磐梯山の理解を深めてほしい」と佐藤

さんは語る。

佐藤さんら有志の活動は、町村を動かした。今年の3月、猪苗代、磐梯、北塩原の3町村でジオパーク協議会が設立された。来年の春には、日本ジオパークに申請をして、秋には認定される予定だ。

「日本ジオパークに認定されたら、次は世界ジオパークの地域は、世界基準に対応していると考えています」と佐藤さんは自信を持って話す。どんなに地質的に素晴らしいとしても、教育、観光などのジオパーク活動が行われていなければ、認定はされない。協議会が中心となり、しっかりとした取り組みをしていくことが必要だ。

「地域住民が、磐梯山を訪れる観光客に説明できるように



Interview

磐梯山の研究者

佐藤 公さん

Profile 1956年1月 北塩原村生まれ
磐梯山噴火記念館副館長。
日本火山学会会員、日本災害情報学会会員。
自称火山オタク。地質学や火山の研究が仕事であり、趣味でもある。金と暇があれば海外の火山にでも出かけたい(実際、数カ所に出かけている)と笑う。

になれば、国内はもとより海外からの観光客誘致も可能になります。経済的にも地域活性化につながります。また、ジオパーク活動をおして磐梯山について学ぶことで、火山防災にも役立ちます。これが最終的な目標です」と話す佐藤さん。最後に、佐藤さんにとつて、磐梯山とはどんな存在かと尋ねた。

「磐梯山という火山の存在自体が素晴らしい。わたしは磐梯山の噴火の被害と恵みの両方を知っていますが、恵みのほうがはるかに大きい。その素晴らしさを皆さんに伝えるのが、わたしのライフワークです」佐藤さんは、笑顔でそう答えた。

取材を終えて

わたしたちにとつて、磐梯山とはどんな山なのか。この町に住んでいると、あまりに身近にありすぎて忘れてしまいがちになるが、この町に磐梯山の恩恵を受けていない人などいないはずだ。

宝の山からもらった宝を大切に、町民みんなで、より有効に利用する。次代を担う、地域のもう一つの宝、子どもたちに受け継いでいく。そのためにも、この山のことをもっとよく知らなければならぬ。

磐梯山の自然環境は、どうなっているか。動植物に変化はないか。大切なものだから、わたしたちにできることを、少し考えてみよう。

宝の山であり、活火山でもある磐梯山の万が一に備えながら、磐梯山とよりうまく共生していく方法を探そう。

特集 宝の山磐梯山 終わり

参考文献 猪苗代町史(自然編)、磐梯山フィールドガイドブック、ジオパークとしての磐梯山地域の可能性(論文・佐藤公著)



磐梯山、今日もありがとう